

研究の概要

1. 研究テーマ

一人ひとりの実態に応じた自立活動の充実
～根拠のある実態把握を通じた授業づくり～

2. テーマ設定の理由と研究のあしあと

小野特別支援学校では、これまでの研究や実践を通して、実態把握(Research)に基づいて個の教育的ニーズを明らかにし、R-PDCA サイクルで指導支援を行うことを確立させてきた。何故ならば、子ども達1人ひとりの実態は千差万別であるからである。子ども達1人ひとりを見つめる時、長所や短所、好きなことや嫌いなこと、感覚の育ち、認知面、身体の動き、コミュニケーションの手段、発達段階など、子どもによって異なることは明らかである。そのため、私たちは子ども達1人ひとりの将来像を想像し、現在の実態からどのような力を身に付けることが、子どもの幸せに繋がるのか、個の教育的ニーズを見極めて指導支援を行わなければならないと考えている。また、それが特別支援教育における専門性であるとも考えている。

例えば、保護者や同僚などの第三者に「何のために、この学習をしているのですか？」と尋ねられたとする。その時に、「〇年生なので、この教材をするべきだと思います」「この活動は喜んで取り組むからです」「ASD なので対人関係の学習が必要だと思います」等と答える人は、子どもの実態を正しく把握できていない。学年や障害名などに注目するのではなく、子どもの内面に目を向けなければ、子どもの教育的ニーズを正しく実態把握することは不可能だからである。このような場合、実態把握に基づいた指導支援がなされないため、ねらいが適切でなかったり、学習課題が子どもに適切でなかったりして、教師も子どもも互いに苦しみ環境が生まれやすい。そして、保護者も巻き込んだ負のスパイラルに繋がる可能性もある。保護者や同僚などの第三者に「何のために、この学習をしているのですか？」と尋ねられた時に、「実態把握から、こんなところが優れていると分かりました。その力を伸ばすためです」や「実態把握から、こんなところに困難さがあると分かりました。困難さと改善することが子どもの幸せに繋がると思います」等、子どもの実態把握から、子どもの教育的ニーズを見出していることを説明できる教師こそ、特別支援教育の専門性を備えた教師であると考え。この場合、子ども1人ひとりの実態把握ができていたため、子ども1人ひとりに必要な環境整備や支援ツールなど、手立ても説明することができる。子どもの実態把握に基づいた授業を行うことで、子どもの実態に応じた課題や活動ができるため、子どもが意欲的に学習に取り組むことができる。そうすると教師もやりがい生まれ、楽しくなる。時には、うまくいかないこともあるが、その時には、何故うまくいかなかったのか原因を考え、改善することで、子どもに必要な指導支援が行えるようになる。子どもが「できた」を積み重ねることで変容し、やがては保護者も巻き込んだ正のスパイラルへと繋がっていく可能性がある。

以上のように、実態把握(R)を重視し、実態把握に基づいた R-PDCA サイクルを行ってきた本校ではあるが、振り返りの中で、1つの懸念が生まれた。それは「本当に的確な実態把握ができているのか」という点である。実態把握は、2つのアセスメントを通して行われるものである。1つ目は、知能検査や発達検査など、標準化された検査を用いるフォーマルアセスメントである。ウェスクラー知能検査シリーズ、田中ビネー知能検査、K-ABC-II、新版K 式発達検査、太田ステージ等が用いられることが多い。2つ目は、標準化されていないアセスメントであるインフォーマルアセスメントである。本人の行動観察や、本人や保護者からの聞き取り、職員との情報共有などを基に行う実態把握である。本来は、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントを組み合わせる情報収集しながら、子どもの実態や特性を把握することが理想的である。しかし、本当のアセスメントのバランスを確認すると、インフォ

ーマルアセスメントに偏っていることが分かった。インフォーマルアセスメントに偏ることにより、個人の主観性が強くなり、「本当に的確な実態把握ができていいのか」と尋ねられた時に、胸を張って、実態把握の根拠を示すことが難しいという状況だった。そのため、「根拠のある実態把握の実現」と「実態把握から授業づくりを行うこと」を研究テーマに掲げ、研究を開始した。

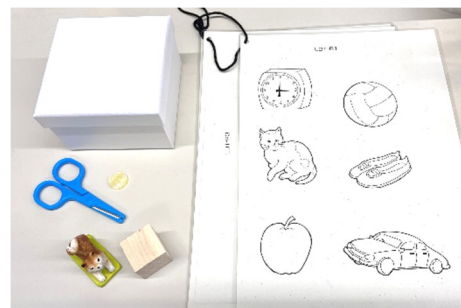
最初に取り組んだことは、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントのバランスの見直しである。今年は4つの観点からアセスメントを行うことに決めた。1つ目は新版K式発達検査の実施(フォーマルアセスメント)。2つ目は太田ステージの実施(フォーマルアセスメント)、3つ目は感覚チェックシートの作成(インフォーマルアセスメント)、4つ目はコミュニケーションチェックシートの作成(インフォーマルアセスメント)である。フォーマルアセスメントを2つ、インフォーマルアセスメントを2つ行うことで、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントを組み合わせ、バランス良く情報収集しながら、子どもの実態や特性を把握することを目指した。

新版 K 式発達検査では、姿勢-運動(P-M)、認知-適応(C-A)、言語-社会(L-S)、全領域の発達段階が分かり、発達年齢(DA)や発達指数(DQ)を知ることができる。新版 K 式発達検査は、本来は専門家が行うことが望ましいとされている。その理由は、検査には厳密な手順があることや、検査者の温情による手助けの有無などが挙げられる。しかし、「専門家以外が検査をしてはいけない」という法律はない。そのため、本校では新版 K 式発達検査を教師が行い、実態把握に繋がれるようにした。新版 K 式発達検査は1つの大きな特徴がある。それは、検査シートに表れる凸凹である。姿勢-運動(P-M)、認知-適応(C-A)、言語-社会(L-S)の発達が、凸凹で視覚的に確認できるため、子どもの強みや弱み、発達の順序や歪み、次の課題などに検討をつけることができる。私たちは、凸凹を確認するだけでなく、そこから「認知の課題を教材に取り入れよう」「言語の課題を教材に取り入れよう」など、授業づくりに繋げるようにした。

太田ステージは、ピアジェの認知発達理論に沿って、課題への反応を操作的に分け、その結果を Stage I ～IVまで分けて定義している。即ち、太田ステージを用いることで、子どものシンボル機能(目の前にない物を別のもの、

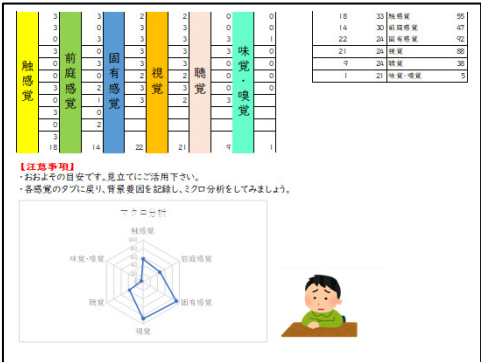
言葉や記号等で表現する機能)や概念形成など、認知の育ちの実態を確かめた。太田ステージは5分～10分間という短い時間で実施ができ、子どもの認知の実態を直に感じることができる。太田ステージを実施したことによって、子どもの認知の実態が分かり、授業づくりに繋がったことが大きく分けて3つあった。1つ目は、認知におけるねらいの明確化である。シンボル機能がまだ認められない子どもや、シンボル機能の芽生えの段階の子どもには、「もの」と「名前」が実感と伴って繋がるような活動をねらいとしたり、身近なものを教材とすることで、目の前にないものをイメージできる機会を学習の中で設定したりした。2つ目は、子どもの認知の実態に合わせた支援ツールの作成である。支援ツールは作るだけでは意味がない。子どもが分かって動ける支援ツールでなければ意味がない。認知の実態が分かることで、具体物、写真、イラスト、文字、大小、色などに配慮し、どのような支援ツールが、その子どもにとって分かって動ける支援ツールなのか考え、支援ツールをテラーメイドすることに繋がられた。3つ目は、声掛けの変化である。長い言葉掛けや、抽象的な言葉掛け(ちょっと、そばに、ちゃんと等)は、子どもが理解できているのか。子どもの認知の実態が分かることで、教師の言

Stage I	シンボル機能がまだ認められない段階
Stage II	シンボル機能の芽生えの段階
Stage III - I	シンボル機能がはっきりと認められる段階
Stage III - II	概念形成の芽生えの段階
Stage IV	基本的な概念が形成された段階



葉掛けを見直し、子どもに伝わる、子どもが分かる言葉掛けを意識するようになった。

感覚チェックシートは、中尾繁樹教授の「感覚-運動プロフィール」をベースとして、小野特別支援学校で作成した感覚に特化したチェックシートである。感覚の育ちの実態把握は、発達の視点から考えても、非常に重要である。感覚を土台として、粗大運動、知覚、巧緻動作、認知・概念、ことば・数等の発達を積み重ねていくものであるが、土台である感覚が感覚過敏や感覚鈍麻、感覚の混乱などにより、正常に処理できなければ、発達に大きな影響を与える。そのため、発達の土台である感覚の育ちの実態把握は、非常に重要なのである。感覚チェックシートを作成するにあたり、主に3つのことに重点を置いた。1つ目は、マイクロ分析の欄を設けたことである。チェック項目に対して、どんな姿や様子を根拠としてチェックしたのか根拠を示すことができるようにした。2つ目は、現場の教師が活用しやすいシートであることである。活用しにくいシートでは意味がない。チェック項目から、子どものどんな実態が知りたいのかを考えることで、チェック項目を厳選した。そうすることで、1つの感覚につき、10～12項目でチェックが行えるようにした。3つ目は、感覚の見える化シートの作成、つまりグラフ化である。感覚ごとにチェックはしたけれど、チェックをして終わりでは意味がない。Excelの強みを活かし、チェックをすることで数値を集計し、感覚をグラフ化することで感覚の見える化を行う。ただし、注意しなければならないのは、グラフ化することが目的ではないということである。グラフ化することで、感覚における困り感、特性におおよその検討をつけ、指導支援に繋げるようにした。



感覚チェックシートの活用例を1つ挙げる。4名の児童の感覚チェックを行った結果、前庭感覚(姿勢保持)や、固有感覚(力加減・ボディイメージ)に教育的ニーズがあると推察することができた。そこで、どんな教材であれば、子ども達が意欲的に活動に取り組み、その中で姿勢保持や力加減、ボディイメージを向上させることができるだろうと考えた。子ども達のことを想像しながら、私は子ども達が大好きな名探偵コナンを題材としたサーキット活動を行うことを計画した。スクーターボードをスケートボードに見立てて、壁蹴りしたり、漕いだりする活動では力加減、全身操作。肋木に登ってビックマック(ボタン)を押して、ネクストコナンズヒントを貰う活動では姿勢保持、筋持久力、四肢協応動作。サッカーボールをドリブルして、的に当てる活動では、片足立ち、姿勢保持、力加減。赤外線に見立てて張り巡らされたすずらんテープを避けて進む活動ではボディイメージ、力加減をねらいとして設定した。また、子ども達が意欲的に活動に取り組めるようにするために、怪盗キッドからお宝を取り返すというテーマで、サーキットを1周回るとにお宝を1つ奪還し、壁に貼ることで、意欲を高めたり、達成感を得られるようにしたりした。他には、教師が怪盗キッドに変装したり、コナンのBGMをサーキット中に流したりすることでも、子どもの意欲の向上に繋げるようにした。以上のように、感覚チェックシートによる感覚の育ちの実態把握から個のねらいを定め、学習の中で、子どもも教師も楽しみながらねらいを達成できるように指導支援を行った活用例である。

コミュニケーションチェックシートでは、自立活動の6区分の1つである「コミュニケーション」を参考として、伝達と理解に特化したチェックシートを作成した。コミュニケーションとは、話し手と聞き手の間に交わされる言葉あるいは他の様々な手段による伝達と理解のプロセスであり、将来、子ども達がそれぞれのステージで幸せに生きていくために必要な力である。コミュニケーションチェックシートを作成するにあたり、主に2つのことに重点を置いた。1つ目は、マイクロ分析欄を設けたことである。感覚チェックシートと同様に、どのような反応、様子を根拠して判断したのか、根拠を記録できるようにした。2つ目は、伝達と理解

コミュニケーション実態把握シート		児童生徒名	学年
6-1 コミュニケーションの基礎に関すること		伝達	理解
発声	自分から声を発することの頻度(音の強さ・弱さ)。(音高・音程・音の長さ・音の速さ・音の遅さ)	○	○
	ブラス・スクリューボード・スイング等の楽器に付いて音の強さ・弱さを表現する。	○	○
	楽器の音の強さ・弱さに合わせて、自分の音を出す。	○	○
受容(手話)	音がある時には、何かが言われているように感じる。	○	○
	音の強さ・弱さ・音程による感情などを聞いて伝えることができる。	○	○
	クレーン操作で音を出すことができる。	○	○
	指3で音を出すことができる。	○	○
	2指で音を出すことができる。	○	○
受容(手話)	ブラス・スクリューボードで音を出すことができる。	○	○
	楽器で音を出すことができる。	○	○
	楽器で音を出すことができる。	○	○
受容(手話)	音の強さ・弱さ・音程による感情などを聞いて伝えることができる。	○	○
	音の強さ・弱さ・音程による感情などを聞いて伝えることができる。	○	○

に特化したものであることである。どのような手段で伝達することができるのか知ること、子どもの表情、動作、サイン、言葉など、全ての子どもの姿から伝達サインに注目することができるようになった。また、理解の実態を知ること、教師は子どもが理解できるように伝えるように意識することができるようになった。コミュニケーションチェックシートを用いて、コミュニケーションの実態把握を行うことで、授業づくり中で以下のように授業づくりに繋げることができた。サーキットで、教師に毛布ブランコを引いて貰う(前庭感覚への直線刺激)活動の前に、発語が難しいので手を合わせて「お願い」のジェスチャーで教師に要求をする機会を設けること。言語だけでは伝わりにくい児童に対して、絵やイラスト、指差し等を用いて具体的に伝えるようにしたこと。活動の中で、児童が選択する機会を設けることで、子どもが意思決定・意思表示をできるようにしたこと。発語の難しい肢体不自由児が、相手に伝える手段として、ビックマックのボタンを用意したこと等が事例として挙げられる。

以上のように、4つの観点から根拠に基づいた実態把握を行い、授業づくりを行ってきた。しかし、大切なことは授業をして終わりではなく、評価し、改善していくことである。そこで、今年度は動画を用いた事後検討会を全職員で実施した。動画に映る子どもや教師の姿を根拠として、評価をすることにした。子どもとの関わりを振り返る際には、インリアル・アプローチの視点をもって評価を行った。「子ども主導型のアプローチとなっているか」「教師の言葉掛けは子どもに伝わるものであったか」「教師は子どものサインを見落としていないか」「SOUL の姿勢で関わることができているか」「言語心理的技法が活用できているか」「言葉の周辺要素が意識できているか」など、子どもと教師の関わりを動画から振り返り、改善に努めるようにした。他には、実態把握と課題・活動内容が適切であったかを、課題や活動に取り組む子どもの姿から振り返りを行った。実態把握が適切であった場合には、どのようにステップアップしていくのかを検討したり、実態把握が適切でなかった場合には、その要因を探ったり、新たな課題を検討したりした。動画を見ながら、事後検討会を行うことで根拠に基づいた評価を行い、改善に繋げることができた。

1年を通して、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントのバランスを見直し、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントを組み合わせ情報収集しながら、子どもの実態や特性を把握することができるよう努めてきた。新版 K 式発達検査、太田ステージ、感覚チェックシート、コミュニケーションチェックシート等を用いて実態把握を行い、実態把握を根拠として授業づくりを行った。そして、動画を根拠とした評価を行い、改善に努めることで R-PDCA サイクルで個の教育的ニーズと向き合いながら、研究を進めた。

3. 成果と課題から今後の研究の方向性

(成果)

- フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントの両面から、子どもの実態把握に取り組むことができた。
- 根拠のある実態把握から、子どもの実態や教育的ニーズに合わせて、授業づくりを進めることができた。
- 事後検討会では、動画を用いて確認することで、根拠に基づく評価を行い、改善に繋げることができた。
- フォーマルアセスメント、インフォーマルアセスメントを通じた実態把握から、この実態に合わせて環境整備をしたり、支援方法を工夫したりすることができた。

(課題から今後の研究の方向性)

- 子どもが「もっとやりたい」「したい」と思えるような意欲を引き出す授業づくりを行いたい。
- チェックシートの項目を見直したり、更新したりすることで、有用性を高めたい。
- チェックシートを個人で終わらせない。ミクロ分析欄を設けることで、根拠を示しながらチェックを行うが、最終的には個人の主観が大きく影響する。複数名でチェックし、その結果を協議することで、より実態に近づきたい。